

施設からの「自己退所」を選択した路上生活者の自立に関する一考察 — 路上生活者の声に焦点をあてて —

日本社会事業大学社会福祉学部福祉援助学科
子ども・家庭福祉コース 増永めぐみ

1. はじめに

執筆者は新宿で路上生活をされている方への傾聴ボランティアを通して、路上生活者の自立に関心を持った。国は、路上生活者や路上生活となることを余儀なくされるおそれのある者も含めて、生活保護制度や、生活困窮者自立支援制度等を実施しているが、路上生活者から「短期間だけ施設に入っていたけど、路上に戻ってきた。」「生活保護を受けていたけど、路上の方が自由だから生活保護を切った。」等の声を聞き、路上生活から一時的に施設等に入って、再び路上生活へと戻る『再路上化』の現状を知った。そして、制度や施策が有効的に機能していないのではないかと疑問を持った。また、路上生活者から「路上生活だけど、施設にいるより自由でいい。」等という声を聞き、路上で生活をしている人は貧困であり、支援が必要であると思っていた執筆者は、その意外な発言に驚き、路上生活者が自立をどのように考えているのか当事者の声を聞きたいと感じた。本研究では、施設からの「自己退所」を選択し、現在、路上生活をされている方へのインタビューを通して、彼らが自立をどのように考え、どのようなことを大切に生活しているのを探り、一人一人がアイデンティティを持って生活を送るにはどのような支援が必要なのか考えていく。

2. 研究方法

本研究では、施設からの「自己退所」を選択し、現在路上生活をされている方が捉える自立感や世界観の把握を目指し、施設からの「自己退所」を経験したことのある路上生活者に対してインタビューを行った。対象者の選定にあたっては、執

筆者が普段フィールドとして活動している新宿区エリアで路上生活をされている方に依頼し、調査協力への同意が得られた方に対してインタビュー調査を実施した。

3. インタビュー調査の結果

1) 対象者の属性

インタビューの実施にあたって協力を得られたのはA、Bの2名であった。調査対象者の性別は両者とも男性であった。年齢については、Aが40代、Bが60代であり、路上年数については、Aが約20年、Bが35年で、両者とも人生の約半分を路上で過ごしていた。施設の入所期間はAが1ヵ月、Bが4ヵ月であった。

2) インタビュー調査から明らかになったこと

図1、2はA、Bへのインタビューから、【入所時】、【入所中】、【退所時】、【現在】の一連のプロセスを整理した表である。

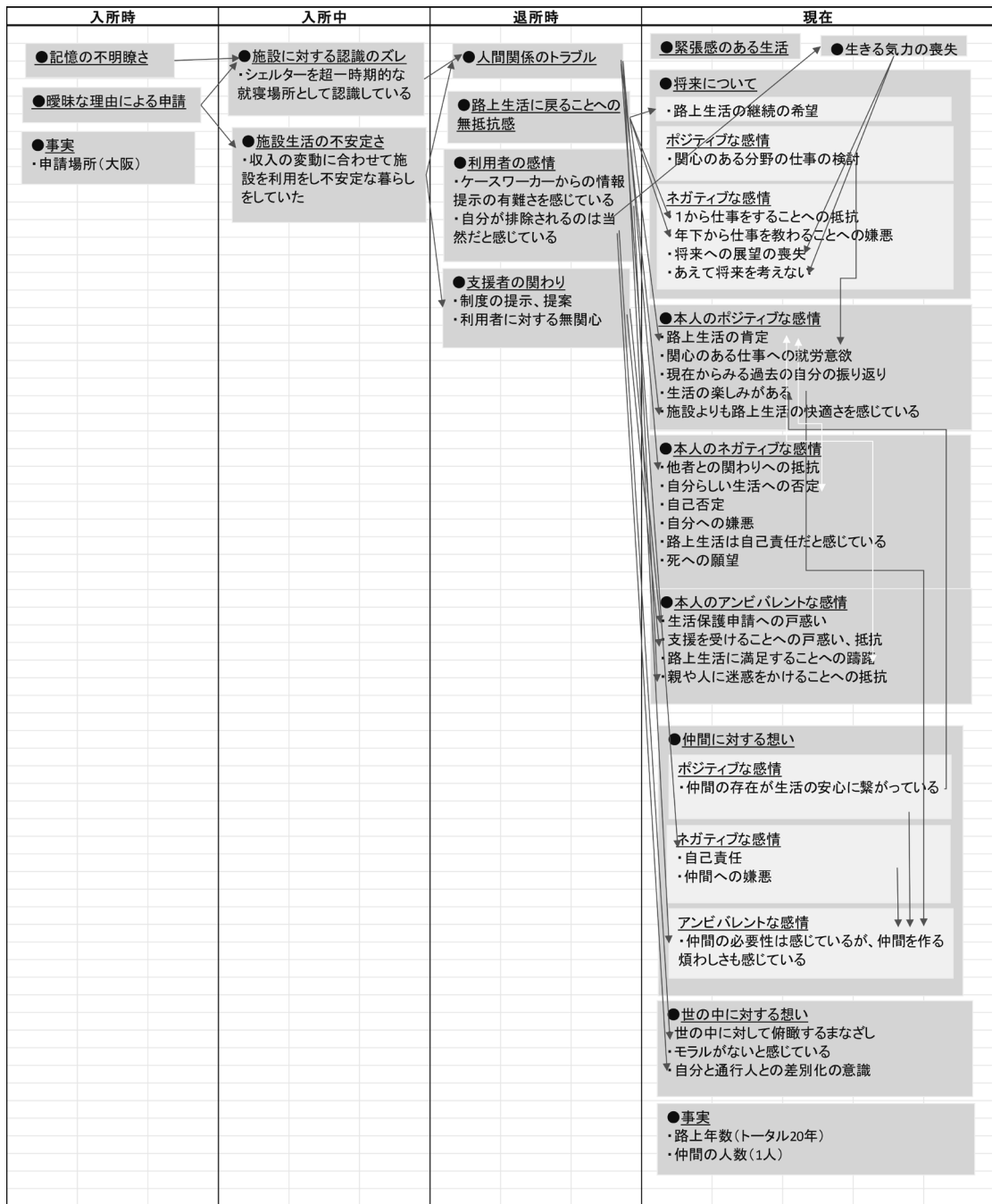


図 A

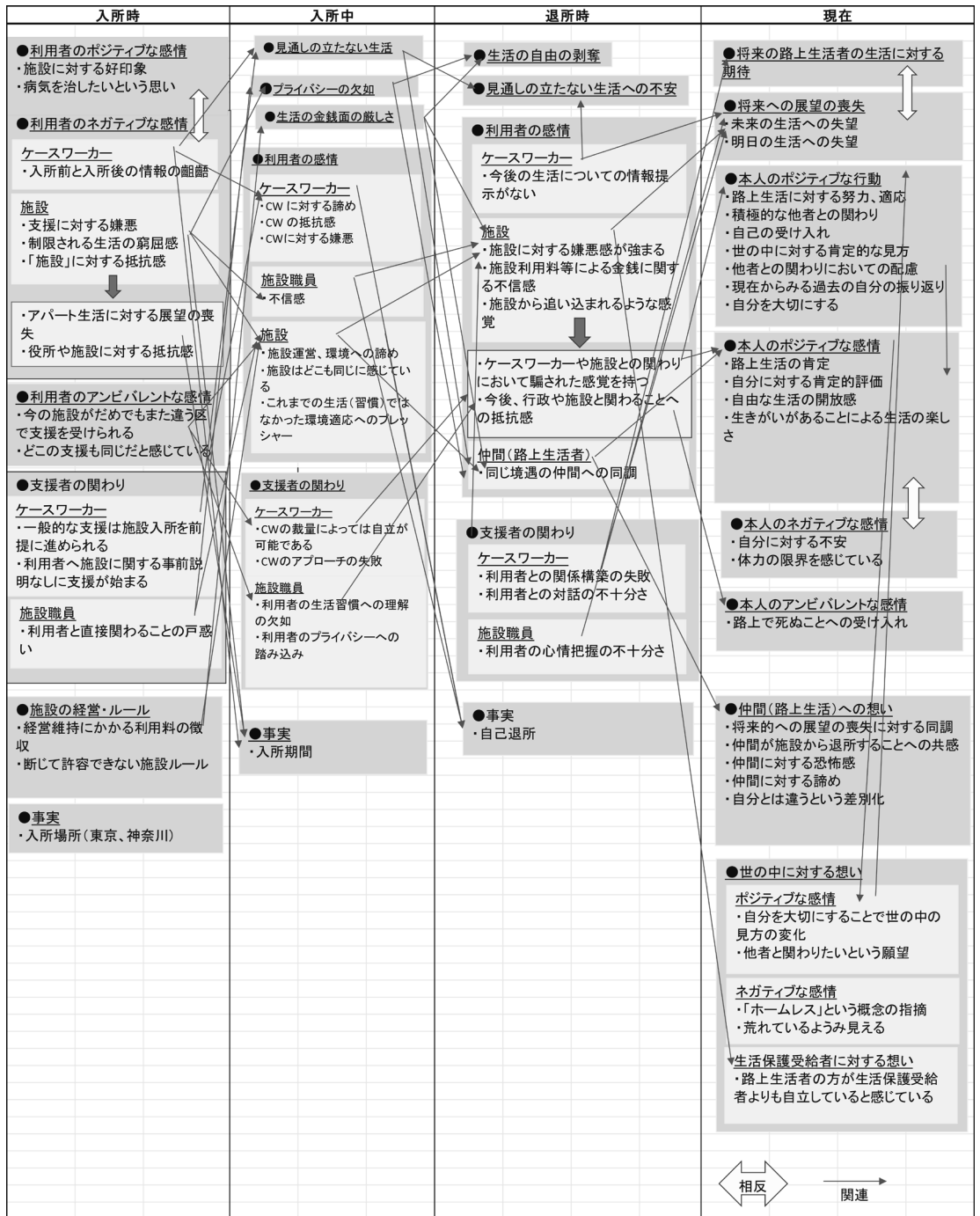


図 B

【入所時】においては、A、B共に制度利用の目的は異なっていたが、制度を利用しようとする試みの姿が捉えられ、両者とも自分の意思で制度を利用する決断をしていたことが明らかになった。

【入所中】においては、A、B共に施設での生活が不安定なものであるということが分かった。特にBにおいては、施設での生活で、見通しの立たない生活やプライバシーの問題、金銭面の厳しさ、ケースワーカーや施設職員との不安定な関わりが、後の「自己退所」の選択に大きく影響していることが明らかになった。

【退所時】においては、【入所中】に感じていたケースワーカーや施設職員との不安定な関わりが「自己退所」の決め手となっていることが分かった。また、そうした経験は支援者との関わりへの抵抗感を生み出すため、「自己退所」を選択したその後は、路上生活に戻ることにしか選択肢がない状態になっていた。また、支援者側も、「自己退所」をした者とは担当制や施設利用者という枠から外れ、その後関わりを持つことが難しくなっていた。

【現在】においては、A、B共に＜アンビバレントな感情＞を持っていた。両者は、現在の路上生活で共に死について考えていることがインタビュー調査で明らかになった。しかし、死について考える一方、それを実行しない、したくない＜アンビバレントな感情＞を持っていた。また、施設からの「自己退所」をした後は、積極的にコミュニティに参加しない限り、関わりのあるコミュニティが非常に狭くなっていることが明らかとなった。

4. 考察

インタビュー調査の結果から、A、Bは共に【現在】の路上生活で＜アンビバレントな感情＞を抱えていることが分かった。両者の＜アンビバレントな感情＞における共通点は、路上で死ぬことについて意識を持っていることであった。しかし、

【現在】の路上生活における＜アンビバレントな感情＞に行き着くまでの一連のプロセスは、A、B共に大きく異なっていたことから、【入所時】、【入所中】、【退所時】、【現在】に対する思いの背景にも＜アンビバレントな感情＞があるのではないかと仮定し、考察を進める。

1) ＜アンビバレントな感情＞を生み出す要因
＜アンビバレントな感情＞を生み出す背景として、執筆者は4つの要因があると考えた。

1点目は「一括りの支援」である。これまでの路上生活者への支援は、当事者の声が十分に取り入れられないまま、「路上生活者」として一括りに支援が進められてきた。しかし、インタビュー調査でも明らかになったように、再路上生活に行き着くまでのプロセスは一人一人異なることから、「路上生活者」として一括りに支援を進めることは彼らのこれまでの人生のプロセスやエピソードを無視することになってしまう。

2点目は「感情を表出できない支援者との関係」である。インタビュー調査の結果から、彼らは【入所時】から【退所時】に至るまでの間、見通しの立たない生活に不安を抱えていることが分かった。しかし、彼らはこれまでの支援者との関わりの中で経験した[ケースワーカーに対する嫌悪]や[施設職員に対する不信感]から、本来相談できるはずの支援者にその不安を打ち明けることができない状況に置かれていることが分かった。こうした支援者に対する不信感や諦めが要因となり、感情を表出できない状況になっているのではないだろうか。

3点目は「行政の内部事情」である。現在の路上生活者への支援は、行政が大きな役割を担っており、施策を実施する場合は、施策の目的や評価の基準等を示す要綱が公表される。また、その施策に対して国からの補助を受ける場合は、要綱との整合性が図られる支援を実施しなければならない

い。しかし、実際の現場で起きている状況や課題は、要綱の基準のみで解決するものばかりではない。しかし、施策との整合性が図られるものでなければ、そもそもの運営資金を確保することが難しくなる。こうした行政の事情により、本来の自立支援という目的とズレが生じてしまっていないだろうか。

4点目は「施設入所に絞られた支援」である。路上生活者への支援は、これまで「施設へ入所させること」が中心となってきた現状がある。本来は、一人一人の状況に応じた選択肢が用意されるべきである。しかし、自立支援の評価書では、施設入所件数が評価の一部基準となっており、その評価によって予算額の割り当てが行われている。このように施設入所が支援の中心となると、施設へ入所することを拒否する路上生活者や、施設からの「自己退所」を選択した路上生活者に対しては支援が消極的になってしまう。

2) <アンビバレントな感情>アプローチしていく必要性

1) <アンビバレントな感情>を生み出す背景でも述べたように、現行の路上生活者の支援は、供給側の論理で進められている部分が多い。この供給側の理論で支援が進められることは、路上生活者に対して支援者の抑圧的な関わりや態度を促進する恐れもある。上記にも述べたように、路上生活者への支援は供給側の論理で進められている傾向にあり、それが「施設に入所させること」となってしまっていないだろうか。確かに、施設へ入所することは、住居を持たない路上生活者にとっては一時的であっても住居を確保できる。しかし、施設へ入所させることによって支援者は「支援をしている錯覚」に陥ってしまっていないだろうか。本来は、個別の事情に合わせたそれぞれの支援が必要であり、施設へ入所することを希望しない者や、それぞれの希望する生き方を支援できるように、柔軟性のある選択肢を用意することが望ましいと考える。一人一人に寄り添った

支援をするなかで、本人さえも気づかない、また、押し込めざるを得ない<アンビバレントな感情>に働きかけることができるようになったら、施設に入所させることを支援の中心としなくとも、個々のニーズに応じた選択肢を増やすことも可能になるのではないだろうか。

3) 文化の対立

現行の路上生活者への支援は、路上生活者が<アンビバレントな感情>を抱いていることに気づかず、また、その感情に寄り添う支援も少ない現状がある。仮に、路上生活者に寄り添う支援者が側にいて<アンビバレントな感情>を受け入れているならば、路上生活者自身も葛藤する思いを置かれている環境と折り合いをつけることができるようになるのではないか。では、なぜ、路上生活者の<アンビバレントな感情>に気づき、そこに寄り添うことが現状難しいのか。それはマジョリティ文化とマイノリティ文化の対立があるからではないか。現在の日本に浸透している社会通念は「働いて、給料を貰って生活すること」が自立だとするものである。そうした社会通念があるなかで、「路上生活者」とは、労働市場から外れた人であり「働いていない者」であるから、マイノリティとなる。つまり、「働いて、給料を貰って生活すること」が当たり前であるかのようにしている今日の日本では、「働かない者」はマジョリティ文化から外れた者として排除の対象になっているのではないか。Bの語りにおいても『誰も好き好んでホームレスやってるやつはいないんだよ。』とあった。このように、自らの意思でマイノリティになったのではなく、彼らも、かつては労働市場のなかで働き、マジョリティ文化のなか存在していた。彼らは路上生活になった現在も就労意欲を失くしてはいないし、自立に向けて生活保護申請等の試みも行ってきたのである。しかし、現在の日本においては、マジョリティ文化から一度外れると、戻ることが困難な構造がある。また、マジョリティ文化のなかにいる多くの人々は、その「当たり前」と言われる定義に疑問すら

持たず、自分がマジョリティ文化の中に存在することで安心感を覚える。そして、マジョリティが持つ文化から外された路上生活者のことを、「自ら外れていった者」と認識し、さらに排除していく。

このように、マイノリティとなった路上生活者は、マジョリティ文化の人々と比べ、圧倒的にコミュニティや人との関わりが少なくなる。人は誰もが生き辛さや生活の不安を抱えて生活している。マジョリティの持つ文化のなかにいる人々は、様々な社会との関わりがあり、物理的にも精神的にも帰属できる場所を複数持ち合わせており、無意識のうちに＜アンビバレントな感情＞を分かち合い、またその気持ちに折り合いをつけている。しかし、路上生活者は社会との関わりや、精神的に帰属できる場所、さらには物理的な住居さえも奪われている状態である。マジョリティの規定する「社会」との関わりが奪われたとき、最後に彼らに残ったものが、＜アンビバレントな感情＞であり、誰とも分かち合うことのできない状態であった。しかし、「社会」との関わりが奪われた路上生活者が抱く＜アンビバレントな感情＞は、実はみな抱えている人間の本質的な感情ではないだろうか。つまり、＜アンビバレントな感情＞を抱くことは、マジョリティもマイノリティも関係なく共通する感情である。だからこそ、マジョリティの文化を持ちながら路上生活者に関わる支援者は＜アンビバレントな感情＞に向き合う必要がある。

5、まとめ

本論文のまとめとして、支援者と路上生活者は、マジョリティの持つ文化を抑圧的に押し付ける関係ではなく、対等な関係でなければならない。こうした対等な関係が保障されれば、支援者が路上生活者の＜アンビバレントな感情＞に気づくことも、向き合うことも成立してくだらう。さらに、支援者が、今日の社会はマジョリティの持つ文化によってマイノリティが規定される「社会」であ

るということに気づくことができれば、本質的な感情へのアプローチが可能となる。本質的な感情にアプローチが可能となると、信頼関係が醸成され、「この人だったら信じてもいい」という信頼関係が生まれるだろう。こうした信頼関係をもとに、路上生活者が「自分を大切にされている感覚」を実感し、また支援者も社会の構造や自分自身と向き合うことが出来たとき、相互作用が生まれ、支援者と路上生活者のコミュニケーションが成立するのである。

本論文で主張したことは簡単に行うことは難しいかもしれない。しかし、本論文で指摘した社会の構造に支援者が気づき、マジョリティとマイノリティの文化的対立を越えて、人としての本質的な文脈に向き合うことが本来あるべき支援の姿ではないだろうか。